

幼老共生シンポジウム

第4回日中合同国際教育シンポジウム

公開シンポジウム・『子どもの養育は老人の仕事ではないのか？』

日時：平成10年11月6日（金）午後3時～午後5時30分

場所：日本国福岡県宗像市・宗像ユリックス・ハーモニーホール

■パネリスト：

- 鼻地三郎……………しいのみ学園理事長，韓国大邱大学校大学院長，福岡教育大学名誉教授
- 藤 星……………中国 中央民族大学民族教育研究所所長
- 海熱提江・烏思曼……中国 新疆大学中文系ウイグル文学研究室 副教授
- MahmatrahimSait……中国 中央民族大学 維吾尔・哈薩克・克和柯尔克孜_言文化系教授
- 丸山孝一……………九州大学大学院人間環境学研究科教授（文化人類学）
- 碓 浩一……………福岡教育大学保健管理センター教授（精神医学）
- 司 会：横山正幸……………福岡教育大学心理学科教授（発達心理学）

■通 訳：リス・ワウ・アブリミティ 九州大学大学院（比較文化社会研究学科）
 ケリシエン・アブリミティ 福岡教育大学大学院

■コメンテーター：

陳理……………中国中央民族大学副学長
頼原俊一……………医療法人・社団 青寿会会長
藤山正二郎………福岡県立大学教授（文化人類学）
袁馨泉……………新疆師範大学副教授
王軍……………中央民族大学民族教育研究所副所長
井上豊久……………福岡教育大学助教授（社会教育学）
海塚俊郎……………広島修道大学教授
一木貞徳……………一木こどもクリニック院長

横山：恐らくこういったテーマが掲げられてのシンポジウムは我が国では初めてではないかと思えます。今、子どもたちの世界、いじめとか不登校とか様々な面で深刻の度を深めています。出口が見えない状態でもあります。こういった問題の背景には、この家族のあり方があるのではないかといわれています。

家族という場合に、私達のイメージは、お父さん、お母さん、そして子ども達。そういったイメージが多いのではないのでしょうか。そこで、忘れられているものは何だろうか。それが実はおじいちゃんおばあちゃんなんですね。今日はその私達がどうも忘れていたのではと思われる、このお年寄りと子どもたちとの関係。この問題について今後どうあったらいいのかについて、皆さんで討議しようというのが趣旨です。さて、この後、今なぜ老子関係なのか。碓先生の方から8分程度で意義を含めて問題の提起をして頂きます。

碓：現代の日本社会では、一般に年を取ると生きている意義がなくなるものだと、多くの人々が思い込んでしまっている。社会からは無用な存在として扱われ、核家族化の進行と共に、老人は家族を失っている。目は悪くなる、歯は悪くなる。氣力体力は衰える、頭はぼけてくる。そのうち寝たきりになって、おしっこ垂れ流して死んでしまうと。

一方、日本の子どもたちは、表情に活気が無く、だんだん無氣力になってきている。生きて気持ちいいという笑いを本当に最近見ない。

そして、現代の日本社会では老人と子どもには殆ど接点がない。

これに対して新疆ウイグル自治区のオアシスにあるホータン、カシュガルの農村に行って調査をしてみると、現地の老人と子どもたちは表情が明るく、元気で、しかも子どもと老人の間には、きわめて豊かな交流がある。

現地のビデオ供覧。

インタビューをすると、子どもたちは生き生きと将来の希望を語り、そして祖父母を敬愛している。確かに経済的にはまだまだ貧しい。しかし子どもと老人の表情は非常に明るい。

何故、このような差があるのか。

日本、中国、欧米諸国いずれにおいても、近代化、産業化した社会は同じような状況にある。

すなわち、社会が合理性、効率性を重視するようになるに連れて、家族の規模は縮小して行く傾向がある。同時にそのことは有機的な子どもを育てる環境の縮小であり、同時に家庭からの老人の排除である。

我が国においても、過去の血族関係による大家族から、縮小して、今や父母と子どもだけの最小単位、すなわち「核家族」になってしまった。

更に、その最小単位の家族さえも、アメリカでは崩壊をしつつある。離婚率が高く、4人の子どものうち1人は片親だけの欠損家庭という報告がある。

アメリカでは、既に1950年代から、「良きアメリカの家庭」の崩壊を危惧する声があった。しかし当時、近代化していく過程での「核家族」の正当性を強く主張したのが、パーソンズである。パーソンズは1950年代のアメリカ社会をいろいろな矛盾が内在する過渡的、流動的な状態と位置づけた。やがて社会の成熟と共に、子どもの養育と社会化を目的とする「核家族」が基本単位となる望ましい社会が形成されると主張した。

ところが、それから半世紀が経過した現在、アメリカの家族は益々流動的で、変化を続けている。例えば、同性愛のペアも家族として扱うべきであるという主張さえも出ている。離婚と再婚によって二つに分裂した家族を包括的に二核家族 (bi-nuclear family) との定義する見解もある。

近年アメリカの後を追いつき、日本でも児童虐待 (child abuse) が増加している。母親が乳児をベランダから投げ捨てる、浴槽で溺死させるということも現実になっている。

このように、物質的に豊かな産業社会がもたらす核家族化において、子どもと老人は過去にあった豊かな関係を失い、老人と子どもの生活環境がきわめて貧困化しつつある。それはとりもなおさず、社会のある種の荒廃を予兆するものである。

21世紀の社会を展望するとき、家族、及び老・子の関係をあらためて見直すことを問題提起としたい。

ガイラツチャン：新疆ウイグル自治区では、お年寄りとの関係は、伝統的な関係を守っており、大変いい状態といえる。現在、ウイグルでは61%の人が農村部で生活している。その殆どが3世代同居である。都市部でも、おじいちゃんおばあちゃんが孫の面倒を見る形式はまだ残っている。特に1歳から3歳までは祖父母が子どもの面倒を見るという形を現在でも続けている。一般的には、一人の子は親が養育するという考え方が残っている。

農村部では祖父母と孫が13、14歳まで一緒に寝るといった習慣がある。

若者たちは、農村部であっても都市部であっても両親と同じ町、近くに住むことを望んでいる。子どもの養育について両親はいろんな形での助力を非常に望んでいる。遠く離れていても、子どもたちを連れて里帰りをしたり、何年か一回、子どもを行かせて、2、3ヶ月祖父母の元で生活させる。両親を自分の家に呼んで、一年のうちの何ヶ月かは自分達の家に住んでもらって、しつけなどをしてもらうという形もある。

又、カシュガル、ホータンなどの地方では、両親がなくなった場合、その名前を自分の子どもにつけることがある。両親の名前をつけられた子どもは、非常に大切にされ、家の中でも宝物として大切にされている。

マイマイテイ：ウイグルでは男女がキスする場面はあまり見られないが、祖父母が子どもを抱いたりキスしたりするという場面がよく見られる。老人と子どもの関係は伝統的にきわめて親密である。

ウイグルの習慣で、家を新築した第一日目は、まず、祖父母に泊ってもらう。生活のすべてにおいて老人が優先であり、老人は精神的には生活の中心に位置づけられ、尊敬されている。子どもは幼い時から、祖父母の愛情を受けるものとなっているので、両者の間の愛情も非常に深い。

騰星：中国での学校教育の始まりは、お年寄りとの間に生まれたといわれている。羊を囲う場所 (露天羊小屋) の老人に子どもを預け、そこで子どもとお年寄りの関係によって、教育が始められた。

家族が受けている影響は、文化というよりどちらかというと、生産関係によって、形成された経済構造によって影響を受けているのではないかと考えられる。

中国には56の民族が存在し、その中の55は少数民族といわれ、漢族が主体民族と言われている。その文化は農村部と都市部で異なり、大家族と核家族とに対応する。この様な家族の変容は、生産方式によって、そこから様々な影響を受けて、変わってきている。

現在中国においては都市部の家族、農村部の家族と2次元的に考えられている。中国においては、農村部ではまだ何世代も一緒に暮らしているという光景が見られる。しかし都市部においては、核家族が増えている。一人っ子政策によって、お父さん、お母さん、それから一人の子ども (男の子又は女の子) という構造になっている。一人っ子は、寂しいということが一つの問題で、もう一つは早熟になるということである。遊び相手が少ないため、いつも大人と一緒に行動している。この二つによって子どもは発達上、多くの問題を抱えている。

丸山：ウイグル文化で、祖父母にとっての孫の1人を、祖父母が自分の子どもとして育てるという習慣の紹介がある。事実その子どもは (孫)、祖父母をお父さん、お母さんと呼ぶ。これは親族呼称と呼び、家族の中で本当のお父さん、お母さんは、お兄さん、お姉さんという。私はそれを見て、大変感銘を受けた。我が子として育てる、一人前に

なるまでは頑張らなければならない、ということで、祖父母にとっては大変な生きがいとなる。私は祖父母と孫の関係において、親子関係がダブっているというような構造を考えたい検討したいと考えている。

儒教文化圏の韓国でも、親と子というのは緊張関係にあるが孫はおじいさんとはいい関係である。思春期に近づくと、男の子はおじいちゃんのところへ行って「サラダ」と言って寝る。そこで性の文化というか、社会化、教育が行われる。男らしさということ学ぶ。老人には伝統的な生活を楽しむ場があって同じ祖先を祭っている特別のところに老人たちが集まり、リクリエーションをしたり、暇をつぶす。そこへ孫たちが勝手に遊びに行く。農村部の老人の顔が韓国では輝いている。

しかしそれが今はだんだん都市化して、若者も都市に向かい、孤独な老人が増えてきている。

：本日の主題は「子どもの養育は老人の仕事ではないか」という表題で、私は92歳であるから、老人の代表としてここに座っている。私は現在も韓国の大学の学長を引き受けており、よく韓国を訪れるが、韓国は街を歩いていると、全然日本と変わらない。しかしひとたび家庭に入りますと、全然違う。

今話にあったように、子どもは親の前ではたばこを吸わない、酒を飲まない。これを厳密に守っている。日本にかつてあったものが向こうに残されていて、日本はそれをなくしている。過去の日本は社会の組織が縦にあった。長幼の序があった。それを戦後全部平等に横倒しにした。じいちゃんも孫も平等である。

しかし郷愁で、現状を悲しんでいるわけにはいかない。いまいろいろ話を聞くと、老人は社会に役立つし、役立つなければいけない。「しいのみ学園」は、幼児の通園施設であるが、92歳の園長の私は、現在も36歳のこどもの前で毎朝朝礼を行っている。私が朝礼に出ない子どもは寂しいらしい。これは私と子どもたちには通ずるものがあるからだと考えている。共通しているもの同士と一緒にいれば、そこに文化が生まれるはずである。今なお中国や韓国に残っているけれども、残念ながら、日本には老人と子どもが共有する文化が失われている。

子どもと老人の共通点を更にもっと探っていくなら、豊かな社会が形成されると考えている。

藤原：私が考えたことを昇地先生が全部言ってしまった。要するに、なぜ優秀な老人をほっておくのか。これは国にとっても、損失である。私は84才であるが、息子には何も譲ってない。陣頭に立って、朝8時にちゃんと出勤して、若い課長たちと一緒に働いている。老人は使えば使える。老人を活かすということを政策としてやれば、20年後に生産労働者4人が一人の老人を養うなどというそんなみっともない時代はありえない。少なくとも我々はそういうことをされたくない。

横山：老人にとって子どもとは何なのか。その辺りを一言ずつ。

碓：子どもにとって老人とは、先程ウイグルのおじいちゃんおばあちゃんは抱きしめてキスをするというお話が出たが、子どもにとって老人とは包み込む存在である。

碓：包み込む、抱擁する存在。これを、有名な小児精神科医のウニコットは、乳幼児が安心して心身の発達が可能な環境をholdingと表現している。holdingとはどういう状態か？何ということはない。おじいちゃんおばあちゃんが、子どもを抱きしめる状態を想像すればよい。

横山：子どもにとっておじいちゃんおばあちゃんは包み込む存在であると。逆に、おじいちゃんおばあちゃんにとって子どもというのはどういう存在か。

碓：ウイグルの子どもは小学校の上級生から中学生になると、おじいちゃんおばあちゃんの世話をするのは自分の責任であるといっていた。お年寄りを保護する、介護するのは自分の責任と子どもの時に思っている。お年寄りとの関係は、養育と介護という、相互扶助である。ある意味で言えば、非常に効率のいい関係。福祉も何もいらない。お互いに助け合う、そういう存在だと思ふ。

ガイラッチャン：おじいちゃんとおばあちゃんの伝えを後の世代に残すという存在である。子どもがいない家庭は非常に寂しいので、子どもがいることで世代、子孫を残すことが一つで、もう一つが先程言った、文化とかです。

藤原：まず先程昇地先生がおっしゃいましたように、私も子どもとお年寄りの間には同じ文化が生まれるのではないかと思う。成人、大人には大人の文化があって、子どもとお年寄りには、共通点があってその中の一つが文化である。

私は1人の個人が生まれてから、死ぬまでの過程において、教育はどのような価値を持っているのかについて考えてみました。いろいろな方々に聞いてみたり、調査をしたり、又自分自身の生活経験から考えたのは、一人の人間に対して一番大きな影響を与えているのは、家庭教育と小学校教育ではないかと考えている。一人の人間が年を取って、老人になっていく時、子どもの時の家庭教育と、小学校のときのことは絶対に忘れないということが、何処でも共通に見られた。

お年寄りとの文化は、完全には言えないが、大人の文化からは脱出していると言えるかもしれない。お年寄りとの関係は、競争社会ではなく、協力関係であると考えられる。この様ないい関係があるにもかかわらず、なぜ我々大人はそのような環境を作れないのか。

：我々が、日ごろの生活においていかにしてそういう幼老共生の文化に芽を出させるかという、これは共存。ともに生きる、ともに生活し、ともに食べるということ。老人と子どもは同じようにこぼしたり、好き嫌いがあつたりしながら食べる。すると、その同じ物を食べるということは、ただ物理的に食べるだけではなくて、老人の心を孫が食べている。孫の心を老人が食べている。ここに文化がある。

もう一つは、老人の死。死んでいく場面はまだ幼いものにも見せるべきである。いかに死が辛いものであるかということ。又、いかに自分のともに生活していた老人が、こういう形でこの世を去っていかなくてはならないのかということ、ある面ではそういう宗教的な厳粛なものを、死ということ形で孫に残していくものである。しかし現代社会はそれ

を見せないようにする。一緒に生活していく、一緒に食べていく、老人の死に立ち会う、文化の形成の根源がそこにある。我々はそれを忘れていないのかと、反省しなければならない。

丸山：親と孫は非常に甘い関係。これを我々は冗談関係といっている。冗談が通じる。親と子は通じない。子と子の子。つまり孫。孫だと通じる。このように鎖状に、ずっと親子関係が代々つながっている。そして親子関係の緊張が祖父母と孫との冗談関係によって緩和される。

おじいちゃんおばあちゃんと孫との冗談が通じるということは、私は学習過程と捉えたいと思う。それが過程としてそれがずっと同じ時間を共有している。時間を共有しているということは孫が成長する、おじいちゃんおばあちゃんもまた成長するということである。成長するとはどういうことかということからという、文化を創造していくということである。今生涯学習の時代といわれている。幼老の好ましい関係の中からどんどん創造的なエネルギーが湧いてくる。これが生涯学習だと思ふ。

横山：先生、ウイグルの方では、祖父母と孫との関係は非常にいい訳ですが、おじいちゃんおばあちゃんはどういう人生観を持っているか。

マイマイテイ：子どもは一番最初に自分の親に対して、愛情を持って優しく接することができなければ、その子どもは、他人、国家、民族のためにやさしく接することができないし、いろんな役に立つこともできない。子どもが小さい時からの躰、それから人格的な形成が非常に大切だ。人格が形成できなかった子どもは、いくら知識を持って有名になっても、それはあまり意味のないことである。ウイグルの老人はそのように考えている。

一木：現在の若い母親には基本的に育児不安がある。自分で育てたことも、兄弟の面倒を見たこともない、或いは夫が手伝ってくれない。同じようにお年寄りが病院に行く時は、自分自身の人生に対する不安がある。だから病院を巡り歩くことになる。時間、場所、経験の共有をお年寄り子どもがするということは、日本社会の家族、育児の重要な課題であり、それを何とかしたいと思っている。

袁：中国ではお年寄りを大変尊敬し、お年寄りは子どもを愛するという伝統があります。お年寄りにも大変な責任感があり、子ども達にも大変な責任感があります。この様な責任感とはどういう物かということ、お年寄りには子どもにも自分の経験やこれまでやってきたことを教える責任があります。子どもはお年寄りからいろんな経験を教えるべきです。しり、そういう物を受けてお年寄りを尊敬し、その為は何ができませんかという責任感を持つべきです。しかし近代社会において多岐にわたるお年寄りとの関係、関係が変容がありました。中国では60歳で定年退職になりませんが、まだ若い、自分がまだ社会に役に立つところがある、ということ、これから更に自分を生かそうと考えているお年寄りが増えているということ、近代社会の変容によって、いかに競争社会を生き延びていくかということ、子どもはいつか学ばないといけない、ということ、お互いに自分のことを生かしたく、近代社会において、どういふこと、弊害として子どもは子どもの方で、お年寄りはお年寄りで問題が起きている。これは共通の問題として考えなければなりません。勿論、定年退職になって、更にいろんな物を学んで、役に立ちたいということも大切だけれども、お年寄りには子どもに対するいろんな経験を教える責任があるとともに、子どももいかにお年寄りを尊敬し、お年寄りに対して自分に何が出来るかを考えていかなければならないと思います。

横山：社会が大きく変化してくると、子どもは子ども、老人は老人でバラバラになってしまう。21世紀を目前に控え、世界もそれぞれ変化していくと思う。ウイグルも状況が変わるかもしれない。そういった中で、老子関係はどうあったらいいのか。

碇：とても1、2分では言えないものではないんですが、まず、昇地先生も、それから藤星先生もおっしゃったように、やはり幼老共生といえますかね。ともに暮らす時間をどうやって多くしていくかという工夫をしないといけない。例えば、幼老園。幼は幼稚園の幼。老は老いですね、幼老園。お年寄りも子どもも一緒に暮らす所があってもいいんじゃないかと。それから、先程子どもと老いとのことを一番人間は覚えているんだと。小学校時代、家庭のことを覚えている。実は覚えていない、もっと0歳から3歳ぐらいまでの記憶がないその子どもの乳幼児期の体験。そこがその人の人生にもすごく大きな役割を果たすと言ったことを考えると、例えばエリクソンなんかがいっているように、やはり幼い頃にお年寄りといふ関係を築いた人が、長じて老人になると、その老人は非常に先に希望を持ち、自分の人生に対して、肯定的な考えを持つ人が多いと。そういう事を言っている訳ですね。これはエリクソンという人が。つまり、そういうふうなできただけ、乳幼児期からお年寄りと一緒にいられるような、そういう場を多くしていく。その工夫をいろんなところでしていく。できる所から始める。

横山：はい、ありがとうございます。ともに暮らすと言いますか、ともに過ごすことができる時間と言うものを考えないといけない、そういう場を作ることを考える。一つの提案として幼老園。という言葉がありました。幼老園があってもいいのではないかと。と、ご提案がありました。ちょっと飛びまして恐縮ですが、昇地先生、昇地先生提案を。21世紀もうすぐです。老子関係を考える。これからどうあったらいいと思いますか。提案をお願いしたいと思います。

：離さないで、一緒にするというのは、空間的な問題と時間的な問題でございます。私は、まず空間的に、老人ホームを山の中につくって、保育園を町中に作るということではなくて、老人ホームと保育園を一緒にする。空間的にまず一緒にする。時間的にも。すると両方から喜びと活力が出てくる、老、幼、発展的なセンターができると。こんな風に考えております。

横山：はあはあ、碇先生と一緒にですね。老幼一元。切り離して遠くにするのではなくて、もっと近い所に空間的にですね、そしてふれあいができる状況を作るんだと。はいありがとうございます。丸山先生お願いします。

丸山：私はそろそろ老人の境界に入ろうとしていますが、先程申しましたように、生涯学習といわれる時代になりました。私は老人の持つリソースと言いか、力と知恵と技術というものを、簡単に老人ホームに持って行ってもらっては困ると。そういうようなことで、更に技術発展しておりますのでお年寄りも楽しく学習して頂いて、そして、ただ昔はこうだったというだけではなくて、新しい所に関心を示して欲しいと思います。ご存知と思いますが、現在高等教育に従事する、学ぶ人が、だいたい18歳のうちの40%を超えています。これはだんだん増えていくでしょう。そうすると、大学出が日本の人口の半分という時代が、もうすぐくるのではないかと予測されます。いわゆる学習社

会ですね。で、高等教育がそれだけ大衆化してくるという時代がもうそこまで来ています。で、この人たちが歳を取ったらどうなるかということですね。そうすると、盆栽をいじるのもいいんですけども、それとともに、先端的な所に少しは、何か専門をきめて、何か好きなことを楽しくやって頂きたい。そうしたら、それを若い人たちと一緒に学ぶ、というような気がします。自分自身はそうなりたいと思って、早くそうなりたいと思うのですが、毎日のことが忙しいんですけども、少し暇になったら、少しそういうほくの新しい専門を持って、若い人と一緒に、そして孫と一緒にそういう事ができれば、或いはよその孫でもいいんですよ。自分の孫だけではなくて。そういう若い世代と一緒に時間が経過せるとお互いによろしいんじゃないかと。老幼園、又は幼老園といいたいでしょうか。そういうアイデアは大変すばらしいと思います。

横山：はい、ありがとうございます。知恵と経験、お年寄りが持っている貴重な知恵と経験を簡単に老人ホームに持って行ってもらうのは困るというお話でした。若い人と一緒にというお話でしたが、更にもう少し具体的にですね、アイデアはございませんか。こう一緒にするための・・・碓先生、昇地先生は幼老園でしたか。

丸山：幼老園ですね。で、それは3世代なんですけども、ただ一緒に過ごすといっても、やはりどうするかということになると思うんですよ。食事をするのもいいんですけど、やっぱり何か楽しいことがないと子どもの方が付いてこないんじゃないでしょうか。寂しいですから。でそれは知的好奇心を刺激するような所があつていいし、それは昔こうだったもいいけれども、一緒にそういったゲームで遊ぶのもいいんですけども、何かお年寄りも何か、昇地先生ほどはいなくてもいいんですけども、何か、勉強するという姿勢を見せることがね。それが大きな、若い世代に対する教えというか、教育になるんじゃないんでしょうか。

横山：はい、ありがとうございました。碓先生ですか？はい。

碓：幼老共生、そういう時代のために、大事なことはまだ他に一杯ある。一つは今のお母さん達が母性、母親ということに過剰な観念を持っている。できないことをしようとしている。そういう、女性がこれからどういうふうにも、社会的に人間として生きていくという道を選ぶか、21世紀。それも一つの大きな問題ですね。それから核家族の問題。今からこれがどうなるのか。先程丸山先生が、他人の子どもでもいいんですよと付け加えられましたね。つまり、これまでこの話は血族の中の人間関係で、物事を語ってきたんですけども。これからの時代、血族以外、もっと広く人間としてある地域を共有する、ある仕事を共有する。その中で、血がつながろうがつながるまいが幼い子に対して老いが、関わっていく。そういう社会が具体的にはどうかわかりませんが、そういう方向で幼、老の接点を探していくと。

横山：ありがとうございました。血がつながろうがつながるまいが、とにかく近くに小さい子がいれば、おじいちゃんおばあちゃんがいる、おじいちゃんおばあちゃんがいれば小さい子ども達がいる。そういう状況を是非作っていく必要があるということですね。それでは、向こうへいきまして、ガイラッチャン先生いかがですか。21世紀はもうすぐです。ウイグルでは伝統的な幼老関係がある訳ですけども、老子関係はこれからどうあったらいいでしょうか。

ガイラッチャン：現在ウイグルの都市部で、子どもが2歳になる前は、幼稚園や保育園に通うことができません。ですから若いお母さんは、勤めているので、子守をしてくれる人を雇っているけれど、なかなか子守をしてくれる人も年齢が低い(15、16歳)人が多いので、その人達も経験不足なので、信用できない部分がある。現在はその子どもと、その子守をしてくれる人と一緒に、おじいちゃん、おばあちゃんのところへ預かってもらおう。おじいちゃん、おばあちゃんたちの経験から、子どもの躰をもらって、手の掛かることはその子守の人がする。そして子守をしてくれる人へも教育をする。そういうことが現在進められているそうです。

横山：ありがとうございました。これは非常に面白いですね。これは、自分のお孫さんというわけではないんですね？必ずしも。先ほどの・・・

ガイラッチャン：自分のお孫さんです。

横山：自分のお孫さんですか。自分のお孫さんをお母さんに代わって育てる、そういう形ですね。よその家の子どもを育てる、面倒を見ると、いう形はないわけですか？

ガイラッチャン：ウイグルで、昔から、遺棄されたまたは両親がいない子どもを育てるという習慣はある。民族を問わず、自分との血縁関係がなくても、自分の子として、孫として育てるといふ人も結構たくさんいらっしゃいます。

藤星：これまでのディスカッションをまとめると、ウイグルの農村では前近代的な家族の形態が未だに保たれている。つまり大家族と一緒に暮らしている。しかし北京や日本といった大都会では、核家族になってしまった。核家族によってどうということが現れたかという、人為的に核家族によって、お年寄りはお年寄り、子どもは子どもという風に、生活が別々になってしまった。21世紀では子どもとお年寄りが一緒にいる場を作ることが必要である。これは、形としては大家族であるが、碓先生が述べたように、血縁関係ではなく、社会協力関係と考えられる。

先ほど丸山先生から大変興味深い問題提起があった。21世紀において、お年寄りも若者も一緒に学ぶ生涯学習という方向性である。21世紀になっていく過程において、どのようなモデルが誕生するのかということは誰にも分からないことである。

中国の大変有名な指導者であり、亡くなった鄭小平のことばかりを語りて終わりたい。つまり、石をつかみながら川を渡るということである。

陳：20世紀が去り、21世紀を迎える時期になりました。お年寄りの問題と子どもの問題は、世紀を渡る大きな問題として捉えることができます。これについては社会だけではなく、政府、国連でも注目されるようになりました。このような大きな問題を福岡教育大学の先生方を中心として行われたシンポジウムは、まさに世界的な問題として考えられるのではないのでしょうか。これは日本の学者が、生涯の問題、現実の問題を見抜いたということだと考えます。それとともに将来に対する、理想、大変すばらしい理想を持っているのではないかと感じました。もちろん今日のシンポジウムは、地域のみならず大きな影響を与え、大きな反響があることでしょう。シンポジウムの中でもありましたが、お年寄りと子どもの関係について話されたのは初めてではないかと思えます。そこで、これを出発点として、これが日本、また世界にも広がっていくことが期待されます。各国はそれぞれの文化背景によって、子ども

とお年寄りの関係には、異なった多くの問題が存在していることはご存じの通りです。しかし人類が誕生してから、我々は多くの課題に挑戦し、多くの問題を抱えながら、それを一つひとつ解決して来ました。従って、きっとすばらしい解決法が出てくると確信しています。

最後に今日のシンポジウムが大変すばらしい成果を得ましたことを、うれしく思い、ご在席のみなさまに心からお礼を申し上げます。これは専門家、学者だけの問題ではなく、みんなの問題として取り上げ、21世紀にすばらしい家庭が築けるように、みんなで努力いたしましょう。どうもありがとうございました。

これだけ社会が子どもの教育にお金とエネルギーを注いでいるというのに、なぜだろうか。無気力化、登校拒否、少年非行の残虐化、児童虐待、オウム真理教事件と、子どもと若者をめぐる話題は暗い。

一方老人についても、社会は超高齢化社会がさし迫ってきて、困っている。人々が長生きをするようになったことを素直に喜ぶムードがない。

なぜなら、戦後の日本社会は、若さに価値があり、「古い」はあたかも不幸であるかのように見なしているからだ。そうであれば「古い」は社会が引き受けなければならない重圧にしか過ぎないだろう。

産業社会は、豊かさと便利さを求めて進んできた。それと同時並行するように、老人と子どものつながりをどんどん希薄にしていった。今やほとんど行き着くところまで行ってしまった感がある。

端的に言えば、子どもは学校にいて、老人は病院にいる。

先進国特有の「教育の困難」と「高齢者対策の困難」の因って来る原因は、このように子どもと老人を切り離して、別個に考えるからではないだろうか。本来子どもと老人は一緒に暮らすべきものであり、子どもと老人は分かち難く、セットで考えるべき事柄ではなからうか。

私はこのシルクロードの地を訪れるたびに、強くそう思うようになった。

一方を生生の象徴とするなら、他方はやがて死にゆく存在を象徴している。人生とは、即ち生と死の両者である。

E. H. エリクソン（精神医学者）は、著書『老年期』の中で、「幼い頃に祖父母と親しい関係を体験した人は、老いてなお自らの人生に肯定的で、先に希望を持ち、なおかつ現に自分の孫達に豊かな関心を持ち続けている」と報告している。

まず手始めに「幼老園」、つまり幼稚園と養老院は一緒にするべきだ、と、しいのみ学園の地三郎氏（九十三歳）は平成十年十一月に宗像ユリックスで行ったシンポジウムで述べた。

子どもと老人。

暮らしの中でこの両者の接点を探す。これこそ、21世紀の実に豊かな課題である。